

2019年度 イラン短期研修報告書

上智大学総合グローバル学部4年

1. はじめに

2019年12月19日から12月29日まで実施されたイラン短期研修への参加を報告する。本プログラムの目的は、イラン学生との交流や現地でのフィールドワーク等を通じ、日本人学生がイランへの理解を深める機会を提供することである。プログラムでは首都テヘランをはじめ、コム、イスファハン、カーシャーンの計4都市を訪れ、イラン国際関係学院（School of International Relations、SIR）での講義やディスカッション、外務省や在イラン日本大使館への訪問、モスクや神学校の視察等を行った。これらの体験を通じイランを国際政治、経済、歴史、文化、ジェンダーといった複数の側面から捉え、考えることができた。特に国際政治におけるイランの主張やその理論を知ることができたのは、新鮮かつ有意義な学びであった。報告書で扱いたい内容はいくつもあるが、以下では研修を通じて私が最も関心を抱いたイランの国際社会に対する「抵抗姿勢」をテーマに、自身が感じたり考えたりしたことをまとめた。

2. 「抵抗」は戦略的か

研修を通じて「国家としてのイラン」を捉え直す中で特に印象に残ったのが、イランの国際社会に対する抵抗（resistance）姿勢である。そして国際政治の中でイランが貫こうとしているこの姿勢が、イランの独自性の一部を形作っていると同時に、国際社会におけるイランの孤立や対立の一因になっていると感じた。

SIRの学生やイランの高官等と国際政治に関する議論をした際、彼らはイランの立場を主張するときに必ずと言ってよいほど抵抗という言葉を使った。例えば、包括的共同作業計画（Joint Comprehensive Plan of Action、JCPOA）合意前、イランの原子力活動が西欧諸国から懸念され開発の停止が要求された。しかしイランは開発を続け、経済制裁を受けることとなった。これについて、なぜ早々に原子力開発を一時停止し交渉することを選択しなかったのかと問うた際、彼らはそれを国際社会に対する抵抗と説明した。またアメリカのJCPOA離脱により再開された経済制裁に対し、彼らは抵抗経済という概念を用いながら「最大の圧力に対しては最大の抵抗で対応する」との立場を取っている。イランの言う抵抗が意味する具体的な行動は必ずしも明白ではなかったが、彼らは抵抗という言葉を用いながら、外部からの圧力には屈しないというメッセージを国内外へ発信しようとしているようであった。アメリカ等への抵抗はまた、体制の正統性や自国の強さを国民へ示すために利用されていると感じた。同時に、国内で広く共有されている国際社会への否定的な感情がこの姿勢を支えているようでもあった。

研修を通じ、この抵抗的な対外姿勢の背景にはイランが抱える不平等への不満と大国としての誇りがあるのではないかと次第に考えるようになった。第一に、他国と比べ我々は西欧諸国から不当な扱いを受けている、という意識がイランでは強いようだ。SIRの教授が講義で述べていたように「全ての国家は平等に尊敬されるべきである」にもかかわらず、それぞれの国家が国際政治において不平等に扱われていることに対する不満が、抵抗に繋がっていると感じられた。例えば先にも述べたように、イランはJCPOAの合意前に原子力開発を止めるよう求められたものの開発を続け、経済制裁を受けた。この選択に対する彼らの主張は、なぜ他にも原子力開発をしている国家があるのに我々だけ厳しい対応を迫られるのか、不平等ではないかというものであり、原子力開発を続けることでその要求に抵抗したのだと言う。

イランの自国に対する誇りもまた、イランの抵抗姿勢の背景にあると感じた。中東の大国としての自負や

文化への誇りをイランが強く持っていることを、イランを訪ねて始めて知った。そして、他国から尊敬されたいという思いがあり自国はそれに値すると考えているにもかかわらず、国際社会から敬意をもって対応されていないことに反発心を抱いているようであった。自国への誇りはまた、他のアクターに指示されて我々が行動を変えることはない、という頑なな態度へと繋がっており、イランが対話や協調へ進むことを困難にしているように感じられた。

イランは国際社会に対する抵抗姿勢を、国内外へ向けた政治戦略として採用しているようだ。しかし、悪いのは不平等に我々を扱う相手である、我々は間違っていないのだから譲歩の余地はないといったイランの姿勢は国際政治における対話や協調を阻み、イランの孤立や対立を助長させるのではないかと考えた。このような厳しい対外姿勢を取ることで他国から譲歩を引き出すことができ、それが国益へと繋がるのであれば、戦略的だと言えるかもしれない。しかし抵抗的な姿勢を取った結果、交渉のテーブルに着くこと自体が困難になったり、他国との対立が深刻化し自国に不利益が生じたりするのであれば、この抵抗姿勢は本当に戦略的であるのかと疑問に思わざるを得ない。

イランの対外姿勢は日本とも、私がこれまで学んできた他の国家とも異なり非常に興味深かった。一方で、抵抗的であるが故に国際社会から孤立し、政治的にも経済的にも厳しい立場に置かれるのであれば、国際社会から自国がどう見られているのかを正しく認識した上で、協調の可能性を模索しより積極的かつ友好的な政策を展開した方が戦略的なのではないか、と考えずにはいられなかった。研修の中でイランの被差別意識や大国としての自負、体制の正統性維持の必要性などを学べたことは、イランが抵抗姿勢を取る理由やそれを容易には修正できない背景をこれまでよりも広い視点から考えることへと繋がった。また、必ずしも理論では説明できないような、国際社会に対してイランが抱く否定的な感情を身をもって感じられたことは、イランを理解する上で非常に重要な学びとなった。

3. おわりに

研修直後にイランを巡る情勢が不安定になり、中東地域の緊張が高まった。そうした中でどのような内容を報告書として扱うべきかと悩んだが、現地で自身が最も面白いと感じたことを記憶が鮮明なうちに残したいという思いから、イランの抵抗姿勢をテーマと定めた。主観的な考えや所感に基づく内容であったため具体性や理論性を持たせることができているが、自身が見出した興味深さがこの報告書を通じて少しでも共有されればと願う。

本報告書ではイランの対外姿勢について扱ったが、研修を通じて得られた学びはもちろんこれだけではない。例えば、女性であるが故に課される様々なルール内での生活には多くの学びがあった。ヒジャブの着用には髪型や服装を気にしなくてもよいという気楽さがあると知った一方で、行動が制限されることにより感じる不自由さを体感した。また、イスラーム革命後に男女隔離が進み女性の行動がそれまで以上に制限されるようになった反面、それが女性の進学や就業を後押ししているという現状を目の当たりにし、ジェンダーに関する議論の複雑さを再認識することもできた。

個人としてではなく本研修の参加者としてイランへ渡航できたことは非常に有意義であった。なぜなら、他の参加者と議論をしたり考えや感想を共有したりしながら、イランへの理解を深められたからである。問題の捉え方や専門分野が参加学生によって異なっていたため、より多角的な視点から考えを巡らせることもできた。一方で、用意されたプログラムだったからこそ見られなかった部分も多々あった。研修中に交流したイラン人のほとんどがエリート層であったため、社会の中でほんの一部の人だけが共有する価値観しか知ることができなかつたり、宗教的・民族的にマイノリティの人々とコミュニケーションを取る機会がなかつたりしたことが理由だ。もちろん、1回の渡航でその国の全てを見聞きし理解することは困難だ。本研修を通じて新たに得た関心を掘り下げるためにも、本研修では知ることのできなかった側面への理解を深めるため

にも、是非またイランへ足を運びたい。